

# 十字御書

弘安四年一月五日 六〇歳

むしもち 十字一百まい・かしひとこ給び了んぬ。正月の一日は日のはじめ、月の始め、としの  
はじめ、春の始め。此をもてなす人は月の西より東をさしてみつがごとく、日の東より  
西へわたりてあきらかなるがごとく、とくもまさり人にもあいせられ候なり。

抑 地獄と仏とはいづれの所に候ぞとたづね候へば、或は地の下と申す経もあり、或  
は西方等と申す経も候。しかれども委細にたづね候へば、我等が五尺の身の内に候とみ  
へて候。さもやをばへ候事は、我等が心の内に父をあなづり、母ををろかにする人は地  
獄其の人の心の内に候。譬へば蓮のたねの中に花と菓とのみゆるがごとし。仏と申す事  
も我等が心の内にを御座はします。譬へば石の中に火あり、珠の中に財のあるがごとし。  
我等凡夫はまつげのちかきと虚空のとをきとは見候事なし。我等が心の内に仏はを御座  
ましけるを知り候はざりけるぞ。たゞし疑ひある事は、我等は父母の精血変じて人とな  
りて候へば、三毒の根本、淫欲の源なり。いかでか仏はわたらせ給ふべきと疑ひ候へど  
も、又うちかへしうちかへし案じ候へば、其のゆわれもやとをばへ候。蓮はきよきもの、  
沼よりいでたり。せんだんはかうばしき物、大地よりをいたり。さくらはをもしろき物、  
木の中より咲いづ。やうきは見めよきもの、下女のばらよりむまれたり。月は山よ  
りいでて山をてらす、わざわいは口より出でて身をやぶる。さいわいは心よりいでて我  
をかざる。

今正月の始めに法華経をくやうしまいらせんを御心は、木より花のさき、  
池より蓮のつぼみ、雪山のせんだんのひらけ、月の始めて出づるなるべし。今日本国の  
法華経をかたきとして、わざわいを千里の外よりまねき出だせり。此をもってをもうに、  
今又法華経を信ずる人はさいわいを万里の外よりあつむべし。影は体より生ずるもの、  
法華経をかたきとする人の国は、体にかげのそうがごとくわざわい來たるべし。法華経  
を信ずる人はせんだんにかをばしさのそなえたるがごとし。又々申し候べし。

正月五日

日 蓮 花 押

をもんすどのゝ女房御返事